

星野富弘さんのこと

要旨

障害を超えることは可能か？ 人は自らの障害に対してどういう態度を取りうるのか。

星野富弘は大学卒業後、体育の教師として高崎市内の中学校に赴任した。そのわずか二カ月あまりの後、放課後のクラブ活動指導の際、誤って首の骨を折り、肩から下の機能一切を失った。その彼が口に筆をくわえ、絵と詩を書き、希望をもって生きようとするまでを、手記『愛、深き淵より。』を中心に、他の詩画集、対談集をも参考に、彼の思考の変遷を辿りながら、人間が生きてはどういうことなのかを考える。

負傷後の星野の生き方の中で、最も印象深いのは〈受容〉、つまり、あるがままの自分を〈受け容れる〉という姿勢だろう。己れをそのままに受け容れ、その時何が可能なかを深く考察し、可能なことだけをこなす。そこには何と多くの可能性が残っていたことだろう。誰にも劣らぬほどの喜びもあれば、幸せもある。そういう発見があった。

はじめに——「生きる」

筆者は六年くらい前より、〈死〉と〈悲しみ〉を主たる研究テーマ

*大町 公

としてきた。この間〈闘病記〉の類いを読む機会が多かったが、そこでは、人は重い病気や障害、あるいは肉親の死などから深い悲しみを味わうことによって、人生の赤裸々な姿に出くわすことになる。

人生をどう生きるか。これは決して特定の人間にのみ課せられる〈哲学的な〉問いではない。生きるにあたり、誰もが逃れることのできない問いであり、答えることを余儀なくされる問いである。今回取り上げるというか、ご登場いただく星野富弘氏の著作を読んで、あらためてこのことを思い知らされた。

この人生をどう生きるのか。普段このような問いは取り立てて問題とはならない。時たまふと現われては消え去るようなものでしかないだろう。これまでの〈生〉がそこでストップさせられる時、問題となる。拙論での筆者のテーマは、障害を負った人間がその後をどう生きるのか、そういう人間の〈生〉の可能性を知ることである。本論ではオルテガの〈生〉の概念を、言い換えれば、生きるということはどういうことなのかについての、オルテガの考えを手がかりとしようと思う。筆者がまだ哲学科の学生だった頃、スペインの哲学者ホセ・オルテガ・イ・ガセの〈生〉の概念を新鮮な気持ちで読んだ。なるほど〈生〉とは、生きるとはそういうことなのかと頭ではわかったつもりであった。たとえば次のような箇所である。

①人は常にある環境(周囲世界)の中にいる。生きるとは環境の中で、いつも何事かをなすことである。

②人は次に自分がしようとする事、なろうとするもの(オルテガはこれを「生の計画」と呼ぶ)を決めねばならない。そこでは、ある程度先の目標も必要となるだろう。

③計画を立て、常に何事かをなすためには、自己と環境とについての何らかの確信が必要である。自己と環境を自らあれこれのものとしてこそ行なえる。この諸確信の体系が「(内的)世界」と呼ばれ、人はこれを頼りにして、あるいは頼みとしてはじめて生きて行くことができるのである。

今はこれくらいにしよう。星野の心の変化をたどる手がかりとして、以下ではオルテガのこれらテーマを借りることにする。

「(内的)世界」と言えば少々堅苦しいが、自分が生きている世の中とはどのようなものであり、その中で生きるとはどういうことなのかについての何らかままとまりある考えである。それは多くの人にとって漠然としたものだろう。必ずしも明確な秩序、体系は見出せないだろう。われわれが日常使う言葉では、これもやや堅いが、「人生観」に近い。しかし、人はそれぞれの「世界」に基づいて、今後こういふふうに生きてゆこうと考える。つまり、「世界」を前提にして、自分の将来の夢を思い描いているのである。

その「世界」が砕け散る時、人はどうするだろうか。思うに、「生きる」ということの最も原初的な地平に降りて行かざるをえないのではないか。

一、星野富弘

筆者が星野富弘の名を知ったのは、四年前、柳田邦男編集の同時代

ノンフィクション選集第三巻『障害とともに―新しい自己(II)』を讀んだ時であった。『愛、深き淵より。』¹⁾を購入したのはその一年後、『四季抄 風の旅』²⁾他を買ったのはそのまた一年後であった。これらの書はすでに何度も何度も版を重ね、たとえば私の手元にあるものでも、前者(一九九四年八月発行)は実に一四刷、後者(一九九五年十二月発行)は一三七刷を数えている。現在までに驚くほど多くの読者を獲得しているのである。目を通してみて、なるほどと思わざるをえなかった。読む者を感動させずにはおかないのである。本書には「生きる」ということに関し、われわれの居すまいを正させるものがある。

いかに生きるべきか。多くの人々にとって、それは青春時代に真剣に問うてみたことはあったが、もはや忘れてしまった問い。そうは言わぬまでも、縁遠くなった問いであろう。日常の繁忙の中では、あらためてそう問うことなく、日々を過ごしてしまふ。実際、そういう問いに拘泥していたのでは、この煩雑な社会を生きていくことはできないだろう。

しかし、例えばガンやエイズといった難病になるとか、自分でなくとも身近な人がなるとか、そのような病氣あるいは不慮の事故などが原因で身近な人を喪うとか、そういう場合、それまで漠然ともっていた人生についての考え方の全体、「内的世界」、そういったものがいったん崩壊するだろう。「世界」の崩壊は人に「絶望」をもたらし。もはや「世界」のほころびを縫うだけでは十分でなく、もう一度初めから自己と環境を解釈し直し、新しい「世界」をつくり上げる必要が出てくるだろう。もちろん多くの人はそう意識してはいない。意識することなく、新たな「世界」をつくるという難事業に取り組まざるをえないのである。

今回取り上げる星野の場合は、二十四歳で障害を負った後、どう生

きようとしたのか。星野の場合、その障害が重度であっただけ、それまでもつていた考え方が木っ端微塵に崩れ去り、もう一度、文字通り根底から、「内的世界」を築き上げねばならなかった。

星野は肩から下、手足が自由にならないという条件の中で、考え直さねばならない。教師を続けることはできない。いやそれどころか、歩くことができない。かゆくても掻くこともできない。人の助けなしには、食事はできない。寝返りができない。排泄もできないのである。これからどうやって生きていくのか。そもそも生きて行く気があるのかどうか。星野にとつては、この問いは「生」そのものであった。星野が問うというよりも、星野が「生」自体から問われている。生きるということの、言わば原初の形へと連れ戻されるのである。生きるとはどういうことなのか、その根本から問い直されることになる。ここで星野の歩んできた道の概略を示しておこう。

一九四六年 四月

群馬県勢多郡東村に生まれる。

七〇年 四月(二四歳)

群馬大学教育学部卒業後、高崎市立倉賀野中学校に体育教師として赴任。

六月(二四歳)

クラブ活動指導中、受傷(頸髄損傷)し、群馬大学病院入院。手足の自由を失う。

七二年十二月(二六歳)

口に筆をくわえて文字を書き始める。

七四年

(二八歳) 手紙のすみに、花の絵を書き始める。

十月(二八歳)

車椅子に初めて乗る。

十二月(二八歳)

病院でキリスト教の洗礼を受ける。

七九年 四月(三三歳)

首の動きで運転する電動車椅子に乗れるようになる。

五月(三三歳)

前橋市で最初の作品展を開く。

九月(三三歳) 退院、自宅に帰る。

八一年 一月(三四歳) 『愛、深き淵より。』(立風書房) 出版。

四月(三五歳) 結婚。

八二年 一月(三五歳) 四季抄『風の旅』(立風書房) 出版。

四月(三六歳) 高崎で「花の詩画展」開催。以後、各地で「花の詩画展」を開く。

八六年 六月(四十歳) 手記『かぎりなくやさしい花々』(偕成社) 出版。

十二月(四十歳) 花の詩画集『鈴の鳴る道』(偕成社) 出版。

八八年十一月(四二歳) 対談『銀色のあしあと』(いのちのことば社) 出版。

九一年 五月(四五歳) 東村立富弘美術館開館。

九二年 四月(四六歳) 花の詩画集『速さのちがう時計』(偕成社) 出版。

九四年 九月(四八歳) アメリカのニューヨーク市にて海外で初の「花の詩画展」を開催。

星野はいかにして自らの障害を乗り越えたか。言い換えれば、星野はどのようにして今あるような星野富弘となったのか。この年譜を形づくったもの、その年譜の背後にあるものを見出さねばならない。

負傷した当時のことをもう少し詳しく見ておこう。星野は群馬大学教育学部卒業後、高崎市立倉賀野中学校に体育教師として赴任した。それから、わずか二カ月のことであった。六月十七日、星野は体操部のクラブ活動を指導中、空中回転をした際、誤って頭部より転落、頸部を強打。病名第四頸椎前方脱臼骨折、頸髄損傷。以後、肩から下一切の自由を失うことになる。

『愛、深き淵より。』は、負傷して十年目に星野が自宅に帰ってのち、

七カ月かかって八〇年十二月に書き上げたものである。表紙には「筆をくわえて綴った生命の記録」との注釈がある。本書は日付がつき、編年体でその時々^①の出来事と星野の思いが述べられる、そういう体裁をとった手記である。負傷した時とは十年の時間的間隔がある分、距離を置いて書かれているだろうが、「あとがき」には「結局、本当に苦しかったところはほんの上っつらしか書けませんでした。」とある。

二、生きる意欲

星野は肩から下の自由を失った。手足を動かすことができない。いや、手足の感覚すらないのである。歩けない。物をつかむことができない。字が書けない。寝返りを打つことができない。人の手を借りなければ排泄もできない。自己が大きく大きく変わったのである。

これまでの確信体系、世界は崩壊する。なぜなら、世界とは、自己と環境の解釈からつくられた諸確信の体系だからである。自己が大きく変わった今、世界もすっかり変わらねばならない。これまでの世界は崩れ去っている。その世界に基づいて打ちたてられた星野の生活設計も、将来の夢もまた無残に壊れただろう。眼前にあるのは、あらゆる解釈を剥ぎ取られた、言わば裸の自己と環境である。つまり、問ひそのもの、謎そのものに他ならない環境と自己なのである。

そういう頃のことであろう。星野はこう回顧している。

「自らのなんと無力なことか。

私は母の体内から出た時のように素裸になってしまった。自分の力で自分を生かすこともできなければ、そんな自分を慰める言葉すら、何ひとつ持ちあわせていなかった。

人から与えられるもの以外に、私を生かしてくれるものは何もないような気がした。」^②

裸の自己と環境を前にしては、目標も「生の計画」も立ちようがない。自己と環境がどういうものであるか何らかの確信があつて初めて、行為することが出来る。再び、自己と環境の解釈を行ない、確信せねばならないのである。解釈する前に必要なのは、あるがままの自己を受け容れることであろうが、さしあたっては自己を見つめることである。いや、まず自己を見つめられるだけの気持ちの上でのゆとりを取り戻すことだろうか。

〈自分を見つめる〉から障害の〈受容〉へ。しかし、その前に、おのずから〈生きる意欲〉が湧き出てくる必要があるのではないか。

〈生きる意欲〉の芽生えなしに、一体、〈自分を見つめる〉ことも、〈受容〉することも可能なかどうか。

〈生きる意欲〉↓〈自分を見つめる〉↓〈受容〉といった単純な図式にだけはならないだろう。一度〈受容〉しても、さらなる〈受容〉のために、〈自分を見つめる〉必要が出てくるだろうし、より一層の〈生きる意欲〉も要求されるだろう。三者は渾然一体となって全面的な〈受容〉へと向かって進んでいくのかもしれないが、まず初めに〈生きる意欲〉であろう。

〈生きる意欲〉なるものはどのようにして生まれてくるのか。普段そういうことは考える必要もないだろう。それと気づくことなく、おのずから湧いてこよう。一度絶望した者が意欲を取り戻すのは、一人で容易なことではない。困難をきわめるだろう。自分以外の者、親、兄弟、友人であるとか、自然といった他者に大きく依存するだろう。

七〇年九月一日、星野は個室から大部屋へ移る。その時こう書いた。「入院以来はじめてベッドから空をみた。したたるような青い秋空だ。大きな窓ガラスには芭蕉の葉がみどり色の風を受けゆつたりとゆれ、その向こうのけやきの木から、かすかな葉ずれの音がきこえてくる。私が苦しみ不安におびえる日々を送っていたこの病院が、こんなにも

明るく美しい空の下にあったなんて!!」⁹

事故後二カ月あまり、やっと自分以外のものに目を向けられるようになった。そればかりでなく、「明るく美しい空」に感動することができた。心にやや余裕が出始めたのであろう。事故にあったことからくる苦しみ、悲しみはさておいて、空に、美しい秋の空に感激している。自分の置かれている状況にもかかわらず感動する心、いや感動できる心、星野にとってこれは宝物ではなかったか。

星野が生への意欲を取り戻すに至った理由を考えると、最も大きいのは人との「出会い」、それに「自己表現手段の獲得」であろう。

七一年十月、入院中の女性Kさんとの出会いがあった。

「Kさんと話をしていると、私はとっても素直になれるような気がした。健康な人がよく私に言う、忍耐とか、根性とか、若さだとかの励ましの言葉も、Kさんの口からは一度もきかれなかった。」「Kさんからは、大切なことをおしえられた。えらくもない、そうかといって、卑屈にもならない、ありのままをみつめながら、ありのままの姿で、胸をはって生きることの勇氣と、その姿の美しさを、おしえられたような気がした。」¹⁰

星野はあるがままの自分を受け容れようとしただけでは無い。自己を見つめた。深く観察したのである。そこに見たものは、弱い自分であった。醜い自分であった。

このような観察を可能にしたものは、生きる意欲であろうが、それをもたらしたのは、表現手段の獲得であった。星野が口に筆をくわえて、文字を書き始めたのである。

「口に筆をくわえて字がかけられることを知った。絵もかけるようになった!! 私はやっと自分が生きてゆけそうな気持ちになった。絶望の淵からなんとかはい上がれそうに思えた——。」¹⁰

彼が字を書こうとしたのは、七二年の十二月であった。負傷してか

らすでに二年半が経過している。少し前にこういうことがあった。夏、もと同室で病院をかわった高久君（当時中学生）のお母さんが訪ねてきて、子供から愛用の帽子に寄せ書きを頼まれてきた。星野のところ帽子が回ってきた。「くやしいけれど私には、どうにもならなかった。ああ、書ける手がほしい!! どこか動かせるところがほしい!!」¹¹

結局、星野が口に筆をくわえ、母が帽子を動かすことによつて、「お富」と書く。高久君は喜んでくれた。この時、「口で字を書きたい!!」と痛切に思う。母にスケッチブックとサインペンを買ってきてもらった。

しかし書けない。一字も、いや一本の線も書けぬまじが過ぎる。「でも私はあきらめたくなかった。口で字を書くことをあきらめるのは唯一つの望みを棄てることであり、生きることをあきらめることでもあるような気がしたからである。」¹²

柳田邦男は「人間は、病氣によつてであれ障害によつてであれ、身体的な行動力を失えば失うほど、精神生活の比重が大きくなる。……精神生活において決定的に重要なのは、自己表現手段の獲得である。」¹³と書く。星野にとつても、字が書けることに寄せる期待は大きかった。しかし、そう簡単にことは進まない。

七二年十二月。看護学生が実習にやってきた。星野の担当は篠原さんであった。

星野は背中の中ずれを防ぐため、日に二、三度体を横向きにしてもらっていた。その時、体が倒れないように、布団を棒のようにまるめて、前後におき、その上から長い帯を回してベッドごと体を縛る。ある日、横向きになっていいる星野に、彼女はこう言ったのである。

「その姿勢で字を書いたらどうでしょう。」

星野は「なにげないひとことがひとりの人間の一生を方向づけてしまふことがある。」¹⁴と書いている。今までも横を向いて書くことを

考えないわけではなかった。これまで上を向いて書くことにこだわりすぎていたのである。

横を向いて書くことは彼にとって一つの「革命」であった。枕の上の頭をほんの少しずらすだけで、力はほとんど必要なかった。字がほとんどと書いてゆく。吐き気もしてきたが、「しかしうれしかった。うれしくて、うれしくて、……やめることはできなかった。」⁽¹⁵⁾星野は高校生の時以来器械体操に励んできた人である。「口で字を書くことだってそれと同じではないかと思った。小さな地味な基礎をつみかさねていけば、器械体操の華麗な技のように、口でだつてきつと美しい文字が書けるようになると思った。」⁽¹⁶⁾彼は希望を持つことができた。さしあつたの目標を持つことができたのである。

三、星野を支えたもの

七四年、負傷して五年目の初夏であつたが、星野はこう書いている。「私は今まで死にたいと思つたことが何度もあつた。けがをした当時は、なんとしても助かりたいと思つたのに、人工呼吸器がとれ、助かるみこみがでてきたら、今度は死にたいと思うようになってしまった。……」

舌を噛み切つたら死ぬかもしれないと考えたりした。食事を食べないで餓死しようともした。が、はらがへつて死にそうだった。

死にそうになると生きたいと思つた。母に首をしめてもらおうとも思つたが、母を殺人犯にさせるわけにはいかなかった。⁽¹⁷⁾

星野は生きた。そして今あるような星野富弘となつた。星野はなぜ星野富弘その人になりえたのか。星野と同じような障害をもつ人の誰もが、星野のように生きることができたわけではない。星野が星野その人になるためにはどういふものが必要であつたのかを、以下で考え

てみよう。

(1) 母

星野の闘病生活を考える上において、母の存在は大きい。いや、母親なしには考えられないと言つてもいいくらい大きかつた。

「かあちゃん」、星野は相変わらずそう呼んでいた。その「かあちゃん」は文字どおり献身的に看病した。首から下が動かない星野には、常に誰かがそばにいななければならないのである。食べさせるのも、字や絵を書く時にじつとスケッチブックを持ち続けるのも、ストレッチャー（寝台車）を押すのも、毎夜ベッドわきの仮眠用ベッドで寝るのも皆母の役であつた。

本書には数カ所「母の回想」なるものが載っている。その中からいくつかを紹介しよう。

「もし自分がたおれたら、富弘がどうなるかと思うと弱音などはいっておれません。この子のために一生そいとげてやらねば、この子の喜ぶことならどんなことをしてでもやってやらねば。この一念で共に歩いてきたのですが……。」⁽¹⁸⁾

星野がキリスト教の洗礼を受けた時も、「この苦しみから救われるなら、この苦しみがいつか希望へとつながるなら……、私としては、われにもすがる思いでした。」⁽¹⁹⁾

そういう母であるにもかかわらず、いやそういう母であつたからだろうか、星野のやり場のない苛立ちの矛先となることも何度かあつたようだ。しかし、星野の母を見る目は確実に変わつていった。星野の心の成長とともに母は違つて見えてきたのである。

「かあちゃん」には、負傷した富弘を、自分のすべてを捧げて看病せずにはいられない弱さがあつた。「そのどうにもならない弱さが、いまの母を支えているもつとも強い力なのではないだろうか。」⁽²⁰⁾

星野はこう続けている。

淡い花は

母の色をしている

弱さと悲しみがまじり合った

あたたかな

母の色をしている⁽²⁾

七四年十二月の記述であるが、星野は「もし私だけがをしなければ、この愛に満ちた母に気づくことなく、私は母をうす汚れたひとりの百姓の女としてしかみられないままに、一生を高慢な気持ちで過ごしてしまう、不幸な人間になってしまったかもしれない⁽²⁾」⁽²⁾と言う。

星野はすでに人間的に大きな成長を遂げている。

大けがをして、思いがけなく自分のもとに戻ってきた息子を、その重度の障害という現実を引き受け、精一杯看病する。なお可能な範囲で、わが子のできる限りの幸せを願う。筆者には、負傷後星野の目指した生き方は無意識のうちに、母を模倣したものではなかったかときえ思えてくる。

(2)キリスト教

星野が生きることに積極的な姿勢を見せ始めるのは、七二年三月頃であろうか。その頃キリスト教との出会いがあった。星野はキリスト教とどのように出会ったのか。

まず、クリスチャンの作家三浦綾子の著書との出会いがあった。病院の検査技師安中さんより、『塩狩峠』、『道ありき』、『光りあるうちに』を借りた。三浦もまた身動きもできぬまま、十三年間もベッドの上で病氣と闘った経験を持つ人であった。「真黒かなしみの部

屋に、ひとすじの光がさし込んでくるのを感じた。」と書く。三浦の言葉、特に「生きるというのには権利ではなく義務です」、「生きてい

るのではなく、生かされているです」に感銘を受ける。⁽²⁾
大学の二年先輩でクリスチャンの米谷さんが見舞いに来てくれた。

彼は「お祈りをさせてください」と言って、祈り始めた。
「まったくの他人の私を自分の体のように思ってくれる米谷さんの背中を見送りながら、私は、自分の苦しみだけのために苦しみ、生きることをあきらめていた自分を恥ずかしく思った。」⁽²⁾

その少し後、彼は聖書を送って寄こした。それに、安中さんや米谷さんが通っていた教会の舟喜牧師も病室まで来てくれた。星野は牧師に聖書を読むことを約束する。

七三年七月。

「私は自分がどこに向かっているのか、なにに向かっているかよいかかわからなかった。……私は心のよりどころを求めていた。そんな私の耳もとを時々、風のようにささやいていく言葉があった。

『労する者、重荷を負う者、我に來たれ』⁽²⁾

星野とキリスト教との関係を考える上において、最も重要なのは、『新約聖書』マタイ伝における、この「労する者、重荷を負う者、我に來たれ」という言葉であろう。『聖書』にはこうある。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎがきます。わたしのくびきは負いやしく、わたしの荷は軽いからです。」(マタイ伝十一章二八〜三〇節)

「我に來たれ」とはどういう意味か。それ以来、その疑問が頭から離れなかった。「そしてその疑問は、今こうしてベッドに横になってい

る私に、新たな重みをもって問いかけてきた。²⁶⁾

星野が聖書の言葉を知るのこれが最初ではなかった。高校時代のある日、家の近くの小さな墓地に、立てられたばかりの十字架を見つけた。そこには「労する者、重荷を負う者、我に来たれ。」の言葉があった。初めてこの言葉を知ったのは、家の豚小屋の堆肥を籠に背負い、畑に運んでいる時で、実際に「重荷」を負っていた。それだけにその時も関心を持ったのだろう。今は目には見えないが、はるかに重い荷物を背負っている。

七四年十二月、キリスト教の洗礼を受けた。その時のことを回想し
て言う。

「私は聖書のほんの一部しかそれもほんのうわつつらしかわかつては
いなかったが、キリストの『私の所へきなさい』という言葉に、素直
についていきたいと思った。私のいまの苦しみは洗礼を受けたからと
いって少なくなるものではないと思うけれど、人を羨んだり、憎んだ
り、許せなかったり、そういうみにくい自分を、忍耐強く許してくれ
る神の前にひざまずきたかった。許されても許されても聖書のいう罪
を犯しつづけるかもしれない。苦しいといってわめき散らす日もある
かもしれない。でも、『父よ彼らをお赦しください。彼らは何をして
いるのか、自分でわからないのです』と、十字架の上から言った、清
らかな人に従って、生きてみようと思った。²⁷⁾

星野は、苦しみ、悩む、弱く醜い自分を丸ごと受け止め、許してく
れる、そういう「神」に抱かれたかったのである。

(3) 花の詩画

花を描こうとしたのは、字を書き始めてから半年ほど過ぎた頃であっ
た。七三年五月、後に星野の妻となる渡辺さんが、ある日道端のヒメ
ジオンをつんで病室まで持ってきてくれた。花が美しかった。見るだ

けでなく、どうしてもスケッチブックに描き留めたいと思って、星野
は筆を口にくわえる。こうして最初の花の絵がで上がった。その後
花の絵を描き続けるが、その作業は「パレットに絵の具を出して富弘
の指示どおりに色をませあわせては、一筆一筆ごとに色や水をふくま
せて口にくわえさせ、そして顔の上に紙を広げ、ちよつとぬるとまた
筆を……」といった、星野にとっても、また母にとっても「気の遠く
なるほど根気のいる」ものであった。²⁸⁾

後に、彼は絵に詩を添えるようになる。詩はにわかには始めたわけ
はなかった。彼は小学校の時から詩が好きだった。自分で詩を書いた
こともあった。高校時代には著名な詩人の作品を読みあさり、萩原朔
太郎、三好達治、立原道造、それに漢詩を数編誦していた。それらは
負傷後でもない星野をずいぶん力づけてくれた。

七九年五月、障害者センター久保田所長の熱心な勧めがあつて、前
橋で星野の絵の展覧会が行なわれた。星野はスケッチブックから気
に入った絵六十枚を選び、出展した。展覧会には星野の予想を裏切り、
連日多くの人が訪れた。

『かぎりなくやさしい花々』は、『愛、深き淵より。』出版五年後、
小学生にも読めるような形で書かれた手記である。そこにはこうある。
絵の前でじっと立ち止まる人もあれば、詩を熱心に書き写している
人もいる。

「わたしはいままで、ひとからしてもらうことばかりだったのに、あ
の人はいま、わたしのかいたものから、何かをうけているのだ……。」「
そしてこう続ける。「わたしは、これから自分が何をしたいやら
よいのかが、うっすらと見えたような気がしました。」「わたしは絵
や文を書くことに、大きな希望と目標が見える思いでした。」²⁹⁾

「私は人の役に立っている」、私は必要とされている」、この思い
は星野に力強く生きる勇気を与えた。『愛、深き淵より。』の章名に

も「詩画に明日を託して」とあるように、絵と詩を書くことを彼は将来の確固とした目標（生きがいと言ってもいい）とすることができたのである。

(4) 車椅子

柳田邦男は『愛、深き淵より。』解説の中で、星野の「再生への転機」の主なものとして次の七つを挙げた。

- ① 同病者たちとの出会い（とくに最初の二、二年）。
- ② 看護学生の一言から、口にサインペンをくわえて字を書くのを覚えさせたこと（三年目の十二月）。
- ③ 信仰を持つようになったこと（四年目の夏）。
- ④ リクライニング付きの外国製車椅子を病院が購入し星野氏に使わせてくれたこと（五年目の秋）。
- ⑤ 花の絵を描き始めたこと（六年目を迎えた頃から）。
- ⑥ 前橋市内の身障者センター所長のすすめによる絵の個展の成功（十年目の五月～七月）。
- ⑦ 母の愛。

病氣からの立ち直りという点、われわれはともすれば「精神的なもの」を重視しがちである。しかし、柳田も指摘するように技術の進歩がここまで到達していなかったら、星野ははるかに多くの苦しみを味わわなくてはならなかったろう。技術の進歩にもいくら感謝しても過ぎることはあるまい。

リクライニング付きの外国製車椅子の四年半後（十年目の四月）には、今度は星野は首の動きだけで運転できる電動車椅子に乗ることになる。このように技術が重度障害者のクオリティ・オブ・ライフの向上に利用されるようになったのは、柳田は、日本にも「それだけの経

済的ゆとりができ（決して十分とはいえないまでも）、福祉機器の技術開発が進み始めた一九七〇年代ならではの出来事」と言っている。

星野の母は、「先生がたが尽力して入手してくださった特製の車椅子（リクライニング付きのもの―筆者注）は、闇にとざされた私たちの生活に光を投げかけてくれました。なにしろ世界がひらけたのですから。」とまで書いています。

四、〈受け容れる〉ということ

星野が首から下の機能一切を失ってなお生きようとしたのは、何によるのか。絶望の中にあつて、何を支えとして生きてきたのかを見てきた。星野にその障害を乗り越えさせ、星野を今日の星野たらしめたのは、①母をはじめとする人たち、②キリスト教、③花の詩画、④今日の技術、であった。

今、星野は多くの人たちの助けを得ながら、「詩画に明日を託」す決心をした。自分をそう方向づけることができたのである。星野は「自己」をどう解釈したのだろう。オルテガによれば、それは「世界」をつくり上げるにはどうしても必要なことであった。まず星野が「自己」をどう考えたかということが決定的に重要な意味を持つ。人の支えを生かすも殺すもこれにかかっている。星野は「自己」をあるがままに〈受け容れ〉ようとした。

障害を負った者にとつては、自分を、自分の肉体を〈受け容れる〉ということがどれほど難しいことか。筆者は、星野の自分の肉体との〈和解〉、あるがままの自分を〈受け容れ〉ようとするその真摯な姿勢に感動を覚える。

『風の旅』のエッセイに次のような一節がある。

「怪我をして全く動けないままに、将来のこと、過ぎた日のことを思

い、悩んでいた時、ふと、激流に流されながら、元いた岸に泳ぎつこうともがいている自分の姿を見たような気がした。そして思った。

『何もあそこに戻らなくてもいいんじゃないか……流されている私に、今できるいちばんよいことをすればいいんだ』

その頃から、私を支配していた闘病という意識が少しずつうすれていったように思っている。歩けない足と動かない手と向き合って、歯をくいしばりながら一日一日を送るのではなく、むしろ動かないからだから、教えられながら生活しようという気持ちになったのである。』

筆者には〈悟り〉の言葉のように聞こえてくる。こういう心境に至ったのはいつ頃だろう。『愛、深き淵より。』の中の記述から推測すれば、キリスト教の信仰を得て後、負傷後まる四年よりも少し前、七四年前半のことであろうか。

元に「戻らなくてもいいんじゃないか」、「今できるいちばんよいことをすればいいんだ」、と。価値的な意味で、星野自身が心の重心を移したのか、それとも心の重心自体が移動したのか。そのいずれでもあったろう。〈悟り〉という言い方が可能であるならば、心の重心のより深い所への移動をこそ指すだろう。絵に関して言えば、「この花を描いてやろうなどと思っていたことを／高慢に感じた／『花に描かせてもらおう』と思った」という姿勢に現われる。

しかし、〈悟り〉あるいは〈寛り〉とは何だろう。『広辞苑』によれば、仏教用語として、「まよいが解けて真理を会得すること。」を意味するとある。こういう心の重心の移動は、ただ漫然と生きている人間に生じる現象ではない。星野の場合、『愛、深き淵より。』の章名にもあるように、「絶望のはてに」であろう。よく絶望してこそ、心の中で質的な変化が起こるのである。

あるがままの自分を引き受けた。もはや「闘病」する必要はない。

ただ生きればいいのか、と。「世界」が変わったのである。これまでとは周りが違って見える。ものの見え方、考え方が変わってくるのである。

〈受け容れる〉という姿勢は、普通に考えられているほど受動的な生き方ではない。星野は「むしろ動かないからだから、教えられながら生活しよう」（傍点筆者）と言う。自分を見つめ、〈受け容れる〉ことによって、あるがままの自分を積極的、能動的に生かそうとする生き方なのである。

筆者は、この時、星野にストアの哲人、特にエピクテトスの横顔を見て取る。エピクテトスもまた足の不自由な人ではあったが、『要録』の冒頭、「もろもろの存在のうち、あるものは私たちの権内にあるけれども、あるものは私たちの権内にはない。」と述べ、「権内にあるもの」と「権内にないもの」の両者を峻別するのである。

以下では、『要録』を徹底して学んだデカルトの『方法序説』第三部、いわゆる「暫定的道徳」より引用する。

われわれが「外なる善」をすべて等しくみずからの「支配しえないもの」、つまり「権内にないもの」だとみなすべきことについて述べた後、デカルトは次のように言っている。

「そして私は、昔、運命の支配を脱して、苦痛や貧困にもかかわらず、神々とその幸福を競うことのできた哲学者たち（ストア哲学者たち）の秘訣も、主としてここにあったのだと思う。というのは、彼らは自然によって彼らに課せられた多くの制限をたえず考察しつつけて、けっきよく、彼らの支配しうるものは彼らの思想しかない、ということを完全に確信するに至り、ただこのことによって、他の事物に対するあらゆる執着を脱したのだからである。しかし彼らはみずからの思想に対しては絶対的な支配権をもっていたのであって、この点では、たとえ生まれつきと社会的地位とにおいていかにめぐまれていても、こ

の哲学をもたず、みずからの欲するところのすべてをけっしてそれほど自由に支配しえぬ人々のだれよりも、彼らがみずからを、より富んでおり、より有力であり、より自由であり、より幸福である、と考えたのは、もつともであつた。」⁽³⁸⁾

星野がストア哲学を学んだというのではない。おそらくエピクテトスの一行も読んではいないだろう。しかし、星野は自らの悲しみ、苦しみを通して、エピクテトスと同様の結論に到達したように思う。エピクテトスの言葉を借りれば、星野は自分の「権内にあるもの」と「権内のないもの」とをはっきりと区別したのである。

「幸せってなんだらう。

喜びってなんだらう。

ほんの少しだけわかつたような気がした。それはどんな境遇の中にも、どんな悲惨な状態の中にもあるということが。そしてそれは一般に不幸といわれているような事態の中でも決して小さくなつたりはしないということが。病氣やけがは、本来、幸、不幸の性格はもつていないのではないだろうか。病氣やけがに、不幸という性格をもたせてしまうのは、人の先入観や生きる姿勢のあり方ではないだろうか。」⁽³⁹⁾
(七四年十月)

どんな「境遇」の中にも、どんな「悲惨な状態」の中にも、喜びもあれば、幸福もある。「一般に不幸と言われているような事態の中でも決して小さくなつたりはしない」。星野も、自分の自由になるのは首から上だけである。星野はこの「境遇」、「悲惨な状態」、「一般に不幸と言われているような事態」を引き受けた。

しかしデカルトも言う。「あらゆる事物をこういう角度から見るとに慣れるためには、長い間の訓練と、たびたびくりかえされる思索

とを、必要とすることは私も認める。」⁽⁴⁰⁾

おそらくデカルト自身そうであつたらうし、星野もまたそうであつたに違いない。

星野は障害を超えたか？ 障害を超えたと言えるのだろうか。いや、それだけでなく、障害を「乗り越える」という（言い方で表される）ような生き方自体をも「乗り越えた」だろう。鳥のように飛べないことが、人間にとって障害でないように、星野にとって手足が動かないことはもはや障害ではなかつた。何も「乗り越えた」なんて言う必要はない。生きている、それだけで「いいんじゃないか」。

星野は肩から下の機能を失つた自分を見つめ、勇気を持って「受容する」。いや勇気すら持つ必要はなかつたらう。筆者はそこには、イエス・キリストに対する信頼があるように思う。「すべて、疲れた人。重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたを休ませてあげます。」というイエスの言葉に支えられていると思う。自分は「労する者、重荷を負う者」である。その自分を「受け容れ」てもらいたい。キリストによって「受け容れ」てもらえばこそ、星野は自分を「受け容れ」ることができたのだろう。先の言葉も「悟り」と言うよりも、キリスト者としての、信仰の賜と言うべきだろうか。

最後に、星野の詩の中で、筆者の最も好きなものを引用し、この稿を終りたい。

木は自分で動きまわることができない

神様に与えられたその場所で

精一杯枝をばり

ゆるされた高さまで一生懸命伸びようとしている

そんな木を

友だちのように思う(七四年初夏)³⁹⁾

注

- 1 『ガリレオをめぐる』法政大学出版、一九八一年
- 2 文藝春秋、一九九三年
- 3 立風書房、一九八一年
- 4 立風書房、一九八二年
- 5 『鈴の鳴る道』偕成社、一九八六年、九四頁
- 6 『愛、深き淵より。』あとがき
- 7 同書、四六頁
- 8 同書、六一頁
- 9 同書、八三～八五頁
- 10 同書、五頁
- 11 同書、九九頁
- 12 同書、一〇二頁
- 13 『障害とともに―新しい自己(II)』、十二頁
- 14 『愛、深き淵より。』、一〇四頁
- 15 同書、一〇四～一〇五頁
- 16 同書、一〇六頁
- 17 同書、一二九頁
- 18 同書、八八頁
- 19 同書、一一四頁
- 20 同書、一三五頁
- 21 同書、一三六頁
- 22 同書、一三五頁
- 23 同書、九一頁
- 24 同書、九三頁
- 25 同書、一一六頁
- 26 同書、九八頁
- 27 同書、一三四～一四五頁
- 28 同書、一三八頁
- 29 『かぎりなくやさしい花々』偕成社、一九八六年、一三〇頁
- 30 『障害とともに―新しい自己(II)』、八～十一頁
- 31 同書、十二頁
- 32 『愛、深き淵より。』、一一四頁
- 33 『四季抄 風の旅』、二二頁
- 34 『愛、深き淵より。』、一一二頁
- 35 『世界の名著 キケロ、エビクテトス、マルクス・アウレリウス』中央公論社、一九六八年、三八五頁
- 36 『世界の名著 デカルト』中央公論社、一九六七年、一八三～一八四頁
- 37 『愛、深き淵より。』、一三三頁
- 38 『世界の名著 デカルト』、一八三頁
- 39 『愛、深き淵より。』、一三〇～一三一頁

Sur M. Tomihiro Hoshino

Isao OMACHI

Peut-on surmonter un grave handicap? Quelle attitude peut-on adopter contre son propre handicap?

M. Tomihiro Hoshino, après être sorti de l'université de Gunma, est devenu professeur de gymnastique dans un collège. Deux mois et demi après, quand il dirigeait le club de gymnastique à l'heure de l'activité récréative après la classe, il s'est gravement blessé. Il s'est fracturé le cou. Il ne pouvait agiter ni les mains ni les pieds. Il a perdu toutes ses fonctions sous l'épaule.

En lisant ses livres, surtout "Amour, depuis le plus profond de l'âme", j'ai étudié ses idées jusqu'à ce qu'il ait trouvé une raison de vivre en écrivant des poèmes et en faisant des peintures de fleurs, tenant un pinceau entre ses dents.

Chez Hoshino, ce qui est le plus important, c'est l'intention de «s'accepter» tel qu'il est. En s'acceptant tel qu'il est, Hoshino examine ce qui est possible pour lui en ce cas-là, et il essaie de faire seulement ce qui est dans ses limites. Là, il y a beaucoup de possibilités. Il éprouve autant de joies et de bonheur.

